

江東区とうきょうすくわくプログラム活動報告書

施設所在地	江東区亀戸3-62-15 ミオカステロ亀戸II101
施設名	もりのなかま保育園亀戸園

1 活動のテーマ

〈テーマ〉

日常にある物や事象に対する探究

〈テーマの設定理由〉

普段の保育のなかで、大人にとっては身近なものにも目を輝かせ、見たり、触って感触を楽しんだり、一人ひとりの子どもがそれぞれに興味をもって遊びを楽しむ姿があった。  
“知らないものや事象との初めての出会い”を多く経験する乳幼児期に、日常にある様々なものや事象に触れ、それを多角的な視点から捉えることで、その物質や事象について好奇心をもち、新たな発見や探求をする機会になると考えテーマを設定した。  
小規模園ならではの環境を生かし、小さいグループで丁寧に関わることで、子どもたちの日常の興味関心を捉えながら、探究を深めていくことができると考えている。

2 活動スケジュール

7月	「日常にある物や事象に対する探究」～片栗粉～
8月	「日常にある物や事象に対する探究」～氷～
9月	「日常にある物や事象に対する探究」～小麦粉～
10月	「日常にある物や事象に対する探究」～石鹼～
11月	「日常にある物や事象に対する探究」～酢と重曹～
12月	「日常にある物や事象に対する探究」～オレンジ～
1月	「日常にある物や事象に対する探究」～オイル～
2月	「日常にある物や事象に対する探究」～色～
3月	「日常にある物や事象に対する探究」～今までの活動から興味を持ったことを探求～

- ・毎月子どもの興味に合わせたテーマで活動し、複数回行うことで探究していく。
- ・活動は毎回記録し、保育者同士、保護者等で共有する。
- ・活動の振り返りから、新たな問いや環境構成を考え、次回の活動に繋げていく。

3 活動のために準備した素材、道具及び環境の構成

<ul style="list-style-type: none"><li>・粉類や酢、重曹、油、食紅、オレンジ等、子どもの興味に合わせた活動に使用する素材。</li><li>・トレーやマドラー、スポイト、カップ等、なるべく子どもが扱いやすく、活動への興味を継続しながら扱えるような道具。</li><li>・少人数で行い、子どもが声や気付きを発信しやすく、保育士もそれを拾いやすい環境構成。</li></ul> 事前に安全面について確認し、安心して安全に活動を行えるよう配慮した環境構成。
--

#### 4 探究活動の実践

##### 〈活動の内容〉

上記活動スケジュールの通り、毎月身近な題材を通して、日常にある物や事象について子どもたちが探究していく活動を行った。毎月複数回実施し、その過程や成果を記録・共有し、次の活動に活かす形で進めた。例えば、片栗粉の活動では、様々な粉を用意し、感触の違いを感じたり、水で溶かし、固体と液体の違いを体験した。スライム状になった触感や変化を観察したり、他の粉ではどうなるか等を試した。また、氷の活動では、手で触って溶ける様子を観察したり、水を凍らせる実験を行い、変化を観察した。さらに溶けた氷を使ってアート製作をした。

##### 〈活動中のこどもの姿、声、こども同士や保育者との関わり〉

はじめは手や体を使って物に触れたり、観察したりしながら、それぞれの変化を楽しんでいた。例えば、片栗粉や氷の冷たさに驚き、手を引っ込めたり「つめたい」「ぬるぬる」等声をあげて、身体で感触を確かめていた。また、オレンジや小麦粉、石鹸などの物質に触れる中で「これはなんだろう？」という興味から、「こうしたらどうなるかな？」と試す姿が見られた。活動の経験を重ねるごとに「〇〇いれてみたい」「こうしたい」と主体的に関わり、自分の思ったように試してみようと意欲的な姿が多く見られるようになった。特に、視覚的に物が変化する様子や予想外の反応に対する驚きが見られた。少人数で行ったことで、友だちの様子を見たり、変化を見て友だちや保育士と顔を見合わせて驚いたりして、喜びや面白さを共有していた。保育士に「どうして？」と質問したり、友だちを真似て遊びの幅を広げたりする姿もあった。保育士が、結果にこだわらず、子どもたち自身が思った方向に自然に活動を進められるようサポートしたことで、子どもたちの興味や意欲をさらに引き出していた。



#### 5 振り返り

##### 〈振り返りによって得た先生の気づき〉

0～2歳児という年齢であっても、それぞれの子どものなりに問いをもったり、自発的に試してみたりと、思っていた以上に興味を持って参加し、好奇心や探求心を深めていたと感じる。子どもたち一人ひとりの興味やペースを尊重して、子どもたちが主体的に探究し、発見を楽しめるような働きかけや環境づくりの重要性を再認識した。

また、友だちと同じ場で行うことや保育士とのやり取りを通じて、喜びや発見を共有し、活動を広げていく姿が印象的だった。本プログラムを通して、学びと遊びが自然に結びつき、発見の喜びと探究心、そして協同する喜びを感じることができた。